

## 『リチャード二世』(1857)と年代記

今野史昭

『リチャード二世』(*King Richard II*)はシェイクスピアの歴史劇の中でも人気のある作品の一つで(Forker 90), 2000年以降もイギリスでは度々上演され、名優たちがリチャード二世を演じてきた。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーでは、2000年のサム・ウェスト(スティーヴン・ピムロット演出)、2007年のジョナサン・スリンガー(マイケル・ボイド演出)、2013年及び2016年のデイヴィッド・テナント(グレゴリー・ドーラン演出)、グローブ座では、2003年のマーク・ライランス(ティム・キャロル演出)と2015年のチャールズ・エドワーズ(サイモン・ゴドウィン演出)が悲劇の国王を演じた。その他、2005年オールド・ヴィック劇場でのケビン・スペイシー(トレヴァー・ナン演出)、2011年ドンマー・ウェアハウスでのエディ・レッドメイン(マイケル・グランデージ演出)のリチャードも注目を集めた。また、舞台だけでなく、2012年にはBBCが制作したテレビ映画『嘆きの王冠 ホロウ・クラウン』(サム・メンデス制作総指揮、ルパート・グールド演出)でも、ベン・ウィショーがリチャードを好演した。

いまでこそこのように人気作となった『リチャード二世』であるが、17世紀までは政治的危険性を孕む作品として上演が禁止されることもあった。その後、1738年コヴェント・ガーデン劇場でのジョン・リッチによる公演、19世紀前半のチャールズ・マクリーディーとエドモンド・キーンの舞台など、『リチャード二世』は興行的にも徐々に成功を取めるようになったが、当時の最大のヒットはキーンの息子チャールズ・キーン(Charles Kean,

1811-68) による上演であった。1857年3月12日、ロンドンのプリンセス劇場でキーンが『リチャード二世』の公演を始めると、合計上演回数が110を超えるほどの好評を博し、20世紀に入っても、ビアボウム・トゥリーやジョン・ギールグッドなど、多くの名優たちがリチャード二世を演じるようになった。まさにキーンの上演が、舞台での『リチャード二世』の人気を高めるのに大いに貢献したと言えよう。

キーンの世界史劇上演のうち、『ヘンリー五世』(1859)と『ヘンリー八世』(1855)の上演用台本についてはすでに拙論でその特徴を論じたが、本稿でも同様に『リチャード二世』の版本を分析し、そこから浮かび上がるキーンの上演に向けた資料収集の実態、とりわけ19世紀に英訳が出版されたばかりの年代記の使用状況を調査することで、本上演の特徴および独自のアレンジによって造り上げられるリチャード二世像について考察する。

## 1

『リチャード二世』の版本の基本構成は『ヘンリー五世』や他の作品とほぼ同じで、「扉 (Title page)」、「奥付」、「登場人物と配役一覧 (Dramatis Personae)」、「背景、音楽、踊りと所作、装飾と家具、衣装、舞台装置、カツラ・ひげ・髪型の制作の担当や監督をした各専門家の名前一覧」、「序文 (Preface)」、「脚注」付きの「本文」、各幕のあとに数頁の「歴史的注釈 (Historical Notes)」となっており、全部で88頁である。

キーンの上演では豪華で大掛かりな舞台装置、背景を多用するため、場面転換に時間がかかり、また原作にはない壮大なスペクタクルの場面を新たに挿入するため、本文を大幅に削除する必要があった。『リチャード二世』の場合、約1,300行も台詞を削っているが (Rittenhouse, "Introduction"), これは全体の約45%にあたり、ちょうど『ヘンリー五世』の場合と同程度の削除率である。主な削除箇所は、追放したヘンリー・ボリングブルックの

人望に対する国王の懸念とアイルランド征伐の戦費調達のためにジョン・オヴ・ゴントの死を願う場面(1幕4場)、王がなかなか到着しないのでせっかくソールズベリー伯が集めた軍が解散してしまう場面(2幕4場)、捕虜になったブッシーとグリーンにボリングブルックが死刑を宣告する場面(3幕1場)、息子のオーマール公が持っていたボリングブルックに対する謀反の連判状を父ヨーク公が発見し(5幕2場)、新国王に告げに行くも、公爵夫人とオーマール公の親子二人の命乞いによりこの大罪が赦される場面(5幕3場)である。また、4幕1場で王不在の中、王位に就こうとするボリングブルックに対しカーライル司教が諫言する場面も削除されている。

一方、『ヘンリー五世』と同じく、原作にはない「歴史的挿話」の場面が3幕と4幕の間に挿し入れられ、複数の年代記と関連資料をもとに、ボリングブルックのロンドン凱旋とリチャードのロンドン塔連行という、ロンドンで実際に起こった史実が再現された。プロンプター用台本に残された記録によると、この場面は493名ものエキストラが参加する壮大なスケールの挿話だったという(Schoch 103)。

序文は6頁で、キーンはまず本作品の特徴を説明し、ジェフリー・チョーサーとジョン・ウィクリフというリチャード二世の時代の偉人二人を紹介して、この時代が文明の発展に極めて重要な時期であったことを論じている。次に、中世史を忠実に描くという方針のもと、コヴェントリーでの馬上槍試合、ミルフォード・ヘイヴンの艦隊、ペンブルック城とフリント城など、背景や舞台装置が典拠どおりに再現されていることを説明している。また、「歴史的挿話」の場面で、5幕2場でヨーク公が語るように「馬にまたがる」ボリングブルックに続いて「悲しく耐え忍ぶ」捕らわれの身の王が登場する様子について詳述している。さらに、娯楽に教養を求める人々の嗜好と、それを理解してこれまで何度も成功してきたことへの自負、上演で使用した音楽と披露した踊り、城やホールなどを描いた背景、当時の衣装などを選定し制作する際の典拠の解説が続き、歴史的正確性が強調されている。

2

作品の冒頭を例に挙げてキーンの版本の特徴を具体的に確認してみると、1幕1場は原作どおり、ランカスター公ジョン・オヴ・ゴントの息子ヘンリー・ボリングブルックがノーフォーク公トマス・モーブレーを反逆罪で訴え、リチャードが二人を召喚する場面で、次のように始まる。

ACT I.

SCENE I. — LONDON — PRIVY COUNCIL CHAMBER IN THE  
PALACE OF WESTMINSTER.

*The walls and roof are decorated with the badges and cognizances of  
Richard II.*<sup>1</sup>

KING RICHARD,<sup>2</sup> (A) *attended by his Privy Council*; JOHN OF  
GAUNT, (B) *and other Nobles*. The CHANCELLOR<sup>3</sup> *and* CON-  
STABLE<sup>4</sup> *sitting at the foot of the Throne*.

*K. Rich.* Old John of Gaunt, time-honour'd Lancaster,  
Hast thou, according to thy oath and bond,  
Brought hither Henry Hereford thy bold son;  
Here to make good the boisterous late appeal,

1 The principal badges and cognizances of King Richard the Second, were the white hart kneeling, collared and chained, or, the sun in splendour; the pod of the *plantagenista*, or broom; and branches of rosemary.

The white hart still remains painted, of a colossal size, on the wall over the door leading to the east cloister from the south aisle of Westminster Abbey.

2 The costume of the king in this scene is taken from the curious and

authentic portrait of Richard, preserved in the Jerusalem Chamber at Westminster Abbey.

3 The Lord Chancellor was Edmund Stafford, Bishop of Exeter.

4 The Lord High Constable was the Duke of Aumerle. The office ceased with Edward Stafford, Duke of Buckingham, who was beheaded for high treason in 1521. It is now merely an appointment to officiate at coronations, and was last held by the late Duke of Wellington, at that of Queen Victoria. (Kean 11)

まず、当時広く読まれていたシェイクスピア「集注版 (Variorum edition)」等との相違点は、場所の指定とト書きである。集注版やチャールズ・ナイト (Charles Knight) の版では、「London. *A Room in the Palace.*」という設定になっているのに対し、キーンはもっと具体的に「ウェストミンスター宮殿の枢密院の間」とし、古物研究協会の会員 (Fellow of the Society of Antiquaries) で建築家のアンソニー・サルヴィン (Anthony Salvin, 1799-1881) の支援を得て、キーンの劇団の背景制作部門の総指揮のトマス・グリーヴ (Thomas Grieve, 1799-1882) が制作メンバーと共にこの背景を描いている (Kean ix)。

脚注の付いたト書きは室内の壁と屋根の装飾に関するもので、リチャード二世の「副紋章 (badges and cognizances)」に関する詳しい解説が脚注1に載っている<sup>1)</sup>。リチャード二世は多くの副紋章を使用していたが、ここではそのうち「鎖に繋がれた首輪をして跪いた白鹿」「光芒を放つ太陽」「エニシダのさや」「ローズマリーの枝」が説明され、ウェストミンスター寺院の中に白鹿の壁画が残っていることも紹介されている。同じく、ト書きの中の「リチャード王」にも脚注2が付いていて、この場面のリチャードの衣装はウェストミンスター寺院にある肖像画をもとに制作されたと、その典拠が明記されている。キーン版の脚注は他の文献から転載したものが多く、この二つの脚注についてもキーンが自分で書いたものではなく、ジェイムズ・ロビンソン・プランシェ (James Robinson Planché, 1796-1880) の本から解

説をそのまま「盗用」したものである<sup>2)</sup> (Planché 158, 149)。

脚注3と4も、ト書きの中の「大法官」と「軍総司令官」という政府の役職に関する語句に施され、この場面で登場する歴史上の人物に関する具体的な説明と、「軍総司令官」という官職の歴史についての解説であるが、この脚注の出典については不明である。

また、ト書きの中の「リチャード王」と「ジョン・オヴ・ゴント」の後ろにはそれぞれ(A)と(B)の記号がついているが、これは「歴史的注釈」と記されている後注で、1幕の後ろに以下の長い説明が掲載されている。

(A) *King Richard,*] Richard the Second, son of Edward the Black Prince, was born in 1366; succeeded his grandfather, King Edward the Third, whilst a child of eleven years of age, on the 20th June, 1377. He was murdered in 1400, in the round tower of Pontefract Castle, Yorkshire, having been previously deposed by his cousin, Henry, Duke of Lancaster, who succeeded him under the title of Henry IV. He was named Richard of Bordeaux, because he was born at Bordeaux, in Gascony, whilst his father ruled there. — *Vide Holinshed's "English Chronicles."*

The monk of Evesham describes King Richard as of the common stature, yellowish hair, fair, round, and feminine face, abrupt in speech, capricious in manners, and too apt to prefer the recommendations of the young to the advice of the elder nobles — prodigal in his gifts, extravagantly splendid in his entertainments and dress, timid as to war, passionate towards his domestics, haughty, and too much devoted to luxury and voluptuousness — fond of late hours, drinking, and other excesses — heavily taxing his people — an encourager of architecture, and most beneficent to the clergy.

(B) *John of Gaunt,*] John of Gaunt was so called from Gant, or Ghent, the place of his birth; he was born in 1340, and died in 1399. His posterity swayed the sceptres of Spain and Portugal, and from him many of our nobility are descended. He did not survive his son's banishment more than three months. (24)

後注(A)の一段落目はリチャード二世の生涯についての解説で、誕生、即位、死去した年と Richard of Bordeaux という名前の由来などが説明され

ている。また、文末には参考文献としてホリンシェッドの年代記が挙げられている。次の段落には国王リチャードの外見、気性、性格、嗜好、浪費癖などについての記述がある。この出典は明かされていないが、『英国王リチャードの背信と死』(*Chronicle of the Betrayal and Death of Richard, King of England*)というフランス語で書かれた作者不詳の年代記(以下、*Betrayal*と表記)の英訳の補遺からそのまま転記したものである(294)。

後注(B)はジョン・オヴ・ゴントに関する説明で、名前の由来、生没年、子孫についての情報や、息子ボリングブルックの国外追放中に死去したことなどが書かれている。この注釈では3つの文が一つの段落としてまとまっているが、出典を調べてみるとそれぞれ異なり、第1文がKnight, 第2文がCréton, 第3文が*Betrayal*からの引用であった。

5幕全体では、脚注が施されている箇所が97にのぼり、『ヘンリー五世』の159箇所(166)ほど多くはないものの、160回以上も上演されたキーンの大ヒット作『ヘンリー八世』の36箇所に比べてはるかに多い。脚注の内容は、歴史上の人物に関する説明、歴史書の該当箇所の引用、中世の役職・慣習・衣装(および典拠)の解説、語義または文意についての説明などで、他の文献や集注版からの引用であっても、出典が記載されないことが多い。例えば、1幕1場の脚注をリストにすると、以下ようになる。

表 第1幕第1場の脚注

幕場	脚注	出典	出典の記載	備考
1.1	1	Planché	×	Planché 158 リチャード二世の副紋章の説明
	2	Planché	×	Planché 149
	3	?	×	Lord Chancellorの説明 Edmund Stafford, Bishop of Exeter Planchéにもこの人名が出てくる
	4	?	×	Lord High Constableの説明 Duke of Aumerle

	5	Knight	×	you come の説明
	6	?	×	appeal の意味
	7	Johnson	×	right-drawn の意味
	8	Malone	×	lewd の意味
	9	?	×	appeal'd の意味
	10	?	×	overweening の意味

出典を調査してみると、10箇所の子注のうち半分の出典が判明し、先述の Planché と Knight のほか、7の Johnson と8の Malone は集注版の子注の転載だったが、この子注の中で出典が記載されているものは一つもない。既に確認したように、子注5から10は語義の解説であるのに対し、子注1から4は中世の慣習、衣装、役職、歴史上の人物に関する説明である。キーンの子注は本文の内容や表現の説明に加え、上演における歴史的正確性、つまり歴史書などの資料を徹底的に調べた上で上演の際にいかに忠実に再現したものであったのかを証明しようとする記述にもなっているのである。

「歴史的注釈」である後注の方は、全体で43箇所に付けられていて、注釈は合計22頁にも及ぶ。『ヘンリー五世』の後注38箇所18頁、『ヘンリー八世』の19箇所20頁と比較すると、それほど大差はないものの、キーンの歴史劇では『リチャード二世』の歴史的注釈が一番多いことがわかる。後注の内容は、上記の例のように歴史上の人物に関する説明のほか、年代記などの歴史書のうち本文に関連する箇所の引用が多い。ナイト版と集注版のほかに、『リチャード二世』の後注で引用されている文献は以下のとおりである。

1. John Froissart, *Chronicles of England*. Translated by Lord Berners. (1523-25)
2. John Stowe, *Chronicles of England*. (1580)
3. Raphael Holinshed, *Chronicles of England, Scotland and Ireland*.

Second edition. (1587)

4. Francis Sandford, *A Genealogical History of the Kings of England and Monarchs of Great Britain, & c., from the Conquest, anno 1066, to the year 1677* (1677)
5. David Hume, *The history of England from the invasion of Julius Caesar to the accession of Henry VII* (1762)
6. Créton, Jean. *The Metrical History*. (1399?) Translated by John Webb. (1824)
7. *Chronicle of the Betrayal and Death of Richard, King of England*. (c. 1400) Translated by Benjamin Williams. (1846)

シェイクスピアが作品を書く際に主な材源として利用したのは、2のホリンシェッドであり、他にもこの中では1のフロワサールの年代記を参考にした可能性が指摘されている<sup>3)</sup>。キーンの「歴史的注釈」の中での引用回数を比較すると、*Betrayal* 12回、Créton 5回、Holinshed 4回、Froissart 3回、Sandford 3回、Stow 1回、Hume 1回で、*Betrayal* が圧倒的に多い。2番目のCrétonも*Betrayal*と同じくリチャード二世の時代に書かれたフランス語の年代記だが、英語に翻訳されたのはどちらも19世紀に入ってからである。つまり、どちらの資料も英語版に限って言えば、ヴィクトリア朝の人々にとっては最新の資料だったのである。実際、ナイト版でもこの「新しい」英語版Crétonが度々引用され、Froissartと合わせてイギリスの年代記とは違う、リチャード二世の時代の歴史を伝える貴重な資料として積極的に使われている。

キーンも作品に関係する歴史の解説として、Crétonを引用する一方で、ナイト版よりも後に出版された*Betrayal*の英訳を「さらに新しい資料」として積極的に引用したのである。この英訳本は出版翌年の雑誌に書評が掲載され、翻訳者ベンジャミン・ウィリアムズ(Benjamin Williams)の功績

が称えられると同時に、本書の価値が高く評価された (*Gentleman's Magazine* 169-70)。おそらく、フランス語版を除いて、キーン版以前にこの歴史書の英語版をシェイクスピアの版本に資料として掲載した例はなかったであろう。他の歴史劇の上演の時と同じように、『リチャード二世』の上演に向けて資料を集める際、最新の研究成果を反映させ、歴史的正確性にこだわった新しい舞台をキーンを追求したのである。

### 3

最後に、キーンが新たに創作した「歴史的挿話」の場면을分析し、キーン独自の演出とリチャード二世像について考察したい。

3幕と4幕の間に加えられた「歴史的挿話」は、馬にまたがったボリングブルックのロンドン凱旋行進と、廃位させられ捕虜となったリチャードがロンドン塔へ連行される場面である。先述のとおり、原作の5幕2場にあるヨーク公から語られる話を壮大なスペクタクルに仕上げ、視覚化したものである。

#### HISTORICAL EPISODE. (A)

LONDON. — *The fronts of the houses adorned with tapestry and hangings, as on occasions of public rejoicing. A vast concourse of people occupying the streets, in expectation of the arrival of Bolingbroke, Duke of Lancaster, and the deposed and captive King Richard the Second. The incidental amusements of the crowd are taken from "Strutt's Sports and Pastimes of the English," including the*

#### DANCE OF ITINERANT FOOLS.

*The Dance Tune is supposed to be as old as the Reign of Edward the Second. (60)*

冒頭のト書きによると、キーンは典拠 (*Sports and Pastimes of the English*) を示して歴史的正確性を追求しながら、エドワード二世の治世の頃の音楽と踊りを挿話の導入で使っている。既に触れたように、ここは500名近くのエキストラが登場する場面で、ロンドン市民がボリングブルックとリチャードの登場を待っていると、音楽が流れ、旅回りの道化役者が踊り始める。

それからトランペットの行進曲が始まり、トランペット奏者たち、市の方形紋章旗、聖パウロの方形紋章旗、衛兵が入場してくる。次はロンドン市長が、職杖と市長の方形紋章旗、刀を持つ者に先導され、州長官に挟まれる形で入場する。その後、参事会員たちに続いて、ロンドンの織物商、食品雑貨商、魚屋、金細工商、仕立て屋、鞍商、パン屋それぞれの同業組合の方形紋章旗を掲げながら、組合長と組合員たちが武装した姿で入ってくる。王家の方形紋章旗がそれに続き、文官の衣装を身にまとった貴族、最後に吟遊詩人が行進する。

この場面にも脚注と後注が沢山付けられていて、紋章に関する解説、ロンドン市長を務めた歴史上の人物の説明、市当局者の服装、同業組合と吟遊詩人について詳しい解説が施されている。

いよいよ、この後、馬に乗ったボリングブルックとリチャードが武装した騎士たちに囲まれながら入場する。二人が登場すると、群衆から熱狂的な叫び声が聞こえてきて、ボリングブルックが市民たちに迎えられる。

*The Duke of Lancaster is received with shouts of enthusiasm.*

*Bolingbroke.* "Thanks, my countrymen and loving friends, I thank you, countrymen."

*Voice from the crowd.* "Long live Henry, the noble Duke of Lancaster!"

*Shouts.*

*Another voice.* "Welcome, long wished for Duke of Lancaster, may all joy and prosperity attend you!"

*Shouts.*

*Another voice.* "Such a lord deserves to be king!"

Shouts repeated.

*Bolingbroke.* "My lords, and friends, here is King Richard, I deliver him into your custody, and beg you to do with him what you wish."

*Different voices.* "God save thee, Bolingbroke! Heaven preserve thee! Welcome, Bolingbroke!"

General shouting of "Long live the Duke of Lancaster!"

[*Flourish of Trumpets and other instruments, the ringing of bells, & c., & c.* (62-63)]

最初のボリングブルックの Thanks から始まる台詞は、キーンが削除した1幕4場と5幕2場にあった台詞で、*Different Voices* の "God save thee" から始まる叫び声も、"Jesus" を "Heaven" に変更してはいるものの、5幕2場でヨーク公が説明する中にある台詞のとおりである。他の市民たちの歓喜の叫び声、リチャードの存在を市民に知らせるボリングブルックの声は、主に *Betrayal* からの引用で、Froissart からの台詞も一箇所だけある。

次にボリングブルックの入場時とは対照的に、リチャードが入ってくると市民たちは急に静まり返る。

KING RICHARD IS RECEIVED IN SILENCE.

*An open space is kept round him that all may see him, and a boy comes forward, pointing with his finger, and saying, "Behold King Richard, who has done so much good to the kingdom of England!"* (63)

リチャードの姿を発見して少年が語るこの好意的な台詞も *Betrayal* にある

言葉をそのまま引用して使ったもので、この年代記には国王を哀れむ見物人  
たちもいたと記されている。これに対し、他の市民たちは強烈な批判の言葉  
を国王に浴びせる。

MURMURS FROM THE MOB.

*Voice from the mob.* "Now are we well avenged on him who has  
governed us so ill!"

*Exclamations.* "To the Tower with him! to the Tower with him!"

(下線は筆者による) (63)

この最初の群衆の声もほぼ *Betrayal* にあるとおりの表現で、ここまでの台  
詞について、キーンは脚注と後注に年代記の該当箇所を掲載し、歴史書で紹  
介されている史実をそのとおりに舞台上で忠実に再現してみせた<sup>4)</sup>。

しかし、ここでは一箇所だけ年代記の表現を変更して使っていて、しかも  
注釈に載せた引用の方も同様に変更して掲載し、出典どおりではない台詞が  
ある。下線部の「彼」は、もともと *Betrayal* の方では「この邪悪な私生児  
(this wicked bastard)」と書かれていた。Froissart と *Betrayal* によると、  
ポリングブルックはリチャード二世を「ジョン」と呼び、王が実は私生児で  
あるという噂を広めていたという (Froissart 377; *Betrayal* 215, 223; Wilson  
212)。年代記にあるとおり、おそらく新国王を歓迎する市民の間でも、リチャ  
ード二世が人々を苦しめてきた「邪悪な私生児」であるという見方が広まって  
いたのであろう。実際、4幕1場253行から始まる以下の台詞において、

NORTHUMBERLAND

My lord —

KING RICHARD

No lord of thine, thou haught insulting man,

Nor no man's lord! I have no name, no title —  
 No, not that name was given me at the font —

「洗礼の際に付けられた名前すらない」とリチャードが語る最後の一行が、私生児として本名ではなく「ジョン」と呼ばれるようになったという上記の話をも暗示しているという説もある。(Forker 405; Wilson 212)

では、なぜキーンは何も説明せずに「私生児」を単に「彼」と変更したのであろうか。それはキーン自身が演じるリチャード二世を、神授であるはずの王という地位を奪われ、さらには私生児ゆえにそもそも国王になる資格もなかったと、王としての尊厳も奪われたまま暗殺される救いのない人物ではなく、観客が同情を寄せる悲劇的国王にしたかったからだと考えられる。「歴史的挿話」の最後の場面で、市民から罵声を浴びたりチャードに、臣下として敬礼しようとする老人から一瞬救いの手が差し伸べられそうになる。

*An old Soldier, who has fought under the banner of Edward the Black Prince. at Cressy and Poitiers, accompanied by his grandson, endeavours to pay homage to the son of his former commander, but is prevented by the mob, and treated with contempt. The procession passes on, and the*

DROP FALLS.

(63)

しかし、結局、それも群衆によって遮られ、この老人が周囲から軽蔑されて行進が続いていくところで「歴史的挿話」の幕が降りる。この老人の行動について、キーンはどこにもその典拠を示しておらず、おそらく国王に同情的な人々に関する年代記の記述をもとに敢えて創作した悲哀の場面だったのであろう。実際、キーンの上演の観客も、一緒に演じていた女優も、キーンの演

じるリチャードの醸成するペースと同情を呼ぶその声に賛辞を贈っている<sup>5)</sup>。シェイクスピアの5幕2場では、ヨーク公と公爵夫人がリチャード二世を哀れむ際、そこで語られる市民たちの国王に対する態度は極めて冷酷であり、全く同情などすることはないが、キーンはフランスの年代記から国王に好意的な少年の発言を引用し、さらに同情的な人物を市民の中に加えることによって、リチャード像を巧みに造り変えていたのであった。

年代記によって国王リチャードの描き方に相違があり、イギリスの年代記よりもフランスの年代記の方が概してリチャードと王妃に対して同情的な記述になっているという (Forker 152)。キーンは歴史的正確性を追求してシェイクスピア作品で描かれる中世の世界を歴史書どおりに再現しようと試み、比較的新しい資料まで集めてそれを典拠とした。その結果、イギリスの年代記よりもフランスの年代記 Créton, *Betrayal* を多用することになり、キーンが創作した「歴史的挿話」にも国王に同情的な要素が加わった。エドモンド・キーンのアッシュロックのように、主に演技によって主人公の人物像を変えてしまう父親とは違い、チャールズ・キーンは多くの歴史書を精査してその中で得た情報を用いて、あくまでも資料に忠実な方向で主人公の人物像を変化させ、本作品の上演を見事に成功させたのであった。

#### 〈注〉

- 1) 紋章については森 1987, 1998 を参照。
- 2) キーン『マクベス』の版本にも出典を示さずにプランシェの解説を無断で転載している箇所がある (Schoch 63)。
- 3) 『リチャード二世』の材源については、アーデン版と『「リチャード二世」解題』で詳細に論じられている (Forker 123-65; 福田 210-15)。
- 4) キーンは「歴史的挿話」の中の群衆の叫び声が年代記に基づくもので、「450年前にロンドンで実際に行った場面」を可能な限り再現していることを、序文の中で明記している (vii)。
- 5) 若い頃にキーンの上演を観たウォルター・ペーター (Walter Pater) と、幼

少期に群衆の一員として本作に出演していたエレン・テリー (Ellen Terry) がキーンの演じるリチャードを称賛している (Schoch 7; Terry 18)。

### 引用文献

- Chronicle of the Betrayal and Death of Richard, King of England*. Translated by Benjamin Williams. English Historical Society, 1846.
- Créton, Jean. *The Metrical History*. Translated by John Webb. *Archaeologia*. Vol. 20. Society of Antiquaries of London, 1824.
- Gentleman's Magazine*. Vol. 28. 1847.
- Kean, Charles. *King Richard the Second, 1857*. Adaptations Shakespeare's Plays. Introduction by David Rittenhouse. Cornmarket Press, 1970.
- Knight, Charles. *Pictorial Edition of the Works of Shakespeare*. 8 Vols. Histories. Vol. 1. 1839-43.
- Planché, James Robinson. *History of British Costume from the Earliest Period to the Close of the 18th Century*. 1834.
- Schoch, Richard W. *Shakespeare's Victorian Stage: Performing History in the Theatre of Charles Kean*. Cambridge UP, 1998.
- Shakespeare, William. *King Richard II*. The Arden Shakespeare. Edited by Charles R. Forker. Thomson Learning, 2002.
- \_\_\_\_\_. *King Richard II*. The New Cambridge Shakespeare. Edited by John Dover Wilson. Cambridge UP, 1968.
- Terry, Ellen. *The Story of My Life: Recollections and Reflections*. Doubleday, Page & Co., 1908.
- 今野史昭. 「チャールズ・キーン『ヘンリー五世』版本研究」『明治大学教養論集』511 (2016年), 151-70.
- \_\_\_\_\_. 「チャールズ・キーン『ヘンリー八世』—— 版本の底本をめぐって ——」『明治大学教養論集』524 (2017年), 13-29.
- 福田恆存. 「『リチャード二世』解題」. 『福田恆存翻譯全集』第5巻. 文藝春秋社, 1992年.
- 森 護. 『シェイクスピアの紋章学』大修館書店, 1987年.
- \_\_\_\_\_. 『紋章学辞典』大修館書店, 1998年.

(こんの・ふみあき 商学部専任講師)